

『たて』の連携を目指すアパレル研究「スカラベ会」

野田 隆弘
(技術士)

1. はじめに

これまで『地場産業』は同じ業種の中において、いわゆる「よこ」のつながりで、様々な企業が業務を行い、産地を形成していた。しかし、これからはもっと幅広く、業界全体の流れの中で各企業が分担しあい、もの作りを行っていくことが求められていると考えられる。アパレル研究「スカラベ会」は当初から「たて」の連携の形成を目標としており、この形態が今後のアパレル・テキスタイル産地における新しい業態の1例にあたるものと考えられる。

2. 黎明期

この会を主宰している尾関猛雄氏は長年にわたり、岐阜のアパレル企業に勤務し、アパレル素材・企画・縫製技術・販売すべてにわたり精通している。尾関氏は業務で数年間中国の縫製工場で生産・技術指導を行い、1994年帰国した後、再び元の勤務先で業務を再開した。尾関氏は多年にわたる中国での企業指導を総括して「日本製はよい製品で中国製品は今一歩であるという状況は最近では一変しており、このままでは岐阜の縫製工場は競争力を失ってしまう。今はまだ個々に高い技術を保有している企業が存在している。しかし、単一の企業では限界があり、ダメである。優れた技術力を持っている企業が集合し、様々な角度から交流を深め、技術の継承をしていかないといけない状況にある。交流を深めることにより、1+1は3にも5になっていく。だから、業界の発展のために今すぐに交流をはじめなければいけない。」とまとめられた。そこで岐阜のアパレル生産企業等の、若手経営者・幹部に声をかけた。若手を対象としたのは「今なら次の世代にバトンタッチできる。」という考えであった。会の名前はいろいろ検討した結果、「スカラベ会」と命名された。「スカラベ」とはファーブル昆虫記にも登場している「ふんころがし」の学名である。“ふん”のように捨ててしまうものでも、みんなで転がして大きく育てよう！とことん話し合おう、しっかり研究し合おう・・・そんな会にしたいとの思いを込めたのが名称の由来である。

こうして1994年秋にスカラベ会がスタートした。当時のメンバーは10社、テキスタイルメーカー、アパレル企画デザイン企業、アパレルメーカー、アパレルプレス工場、縫製機器販売会社、アパレル検査機関などであった。服作りに関わる多様なメンバーが集まっているのが大きな特徴であった。例会は原則として毎月1回開催している。月に1度とはいえ、昼間の日常業務を済ましてから、約束時間に集まるということは至難なことである。それがもう8年近くも続いているのである。たいへん貴重なことである。毎月の例会にはメンバーが自分の専門分野の技術テーマを発表し、お互いに問題点・業界の課題などの議論を重ねる、あるいは講師を招聘し、外部の動向・新しい情報を吸収する等の活動を行っている。メンバーの意識はたいへん高く、例会への出席率も目を見張るものがある。メンバーの中にはアパレルファッションの先進地であるイタリアへ「アパレルパターンに関する短期留学」したもの

もあり、その留学成果の報告会の開催、あるいは「設計品質であるアパレルデザインと縫製技術・アイロン作業などの製造品質との関わり合い」の報告などがある。

3. 発展期

会の活動が順調に進み、定着しはじめるとメンバーの中から外部との交流の必要性を求める意見が生まれてきた。このニーズに答えていくために県外の企業視察・テキスタイル関連企業との交流が始まった。

まずはじめに1996年には石川県能美郡根上町の小松精練（株）を訪問し、「生地流れの不良」について各工場長との意見交換会を行った。交流会を経て参加メンバーはアパレル素材開発の困難さを再認識することができた。（この企業は我が国では有数のアパレル素材の開発メーカーであり、常にシーズンに先がけ、話題のアパレル素材を開発・供給しているたいへん技術力の高い企業である。）

1998年にはアパレル副資材メーカーのバイテック（株）から技術者を招聘し、「布の風合い」についての講演会を行った。（この講演会には会のメンバー以外にも声をかけ、約60名の参加者があった。）この講演内容を踏まえて、翌年にはすぐにこのメーカーへ企業視察として訪問し、技術者首脳陣と技術交流を行い、フットワークとまとまりの良さを確認した。同年秋に和歌山市の（株）島精機製作所を視察し、横編みニット機の製造工程、ニットデザインセンターなどを見学した。常に新製品を世に送り出す同社の技術開発力と斬新なニットデザインにレベルの高さを実感してきた。

翌年1999年には我が国の主要な毛織物産地である愛知県津島市の2名の若手経営者の毛織物工場を視察し、彼らのグループである「ハイパー会」との交流が始まった。交流会の風景を図1に示す。

2000年には名古屋市緑区の有松絞会館において「有松しぼり研究グループ」との交流が始まった。同年秋にはこの会の活動状況を全世界に発信するためにホームページを開設した。

4. ジャパンクリエーション2001への出展

平成12年度（2000年度）に岐阜県中小企業団体中央会から「平成12年度連携組織調査開発等支援事業」の団体グループとして認定を受けた。この事業計画に基づき、1年間にわたり、アパレル素材の企画と開発、アパレル製品の開発、パターン・縫製アタッチメントなどの縫製生産技術開発と研究、新商品開発を行い、「ジャパンクリエーション2001」での発表、同発表会においてアンケート調査を行い、市場動向を把握し研究、この結果をホームページで公開し結果の求評、活動内容、アンケート調査活動の求評結果の考察、などの事業を行った。

この一連の活動の中で最大の事業は「ジャパンクリエーション2001」への出展であった。この展示会は平成12年12月6～8日に東京ビックサイトにおいて開催された。全体の来場者おおむね6万人と報告されている。この展示会への出展目的は「新しい時代に生きる人々の心豊かで快適な生活創造の為にスカラベの能力を駆使し、新しい衣服の価値を創造し、グローバルスタンダードを越える独自の提案をする」としている。出展内容は「縫製技術、縫製仕様の開発をベースに人々の生活のカジュアル化、（日常生活の充実）に対応した新しいイメージ（スタイリング、デザイン、アイテム）の衣服をファクトリー主体で開発、提案する。」

と位置づけている。出展品目は「ノンエイジな衣服、カジュアル生活関連」、開発テーマは「伝統とモダン・日常・温もりとテクノロジー（ローテクとハイテク）とし、婦人服など14点出展した。出展ブース風景を図2に示す。来場者が多すぎて多忙を極めたが、スカラベ会ブースを訪問した来場者にアンケート調査を行い、224名分の有効な調査票を得た。

来訪者の内訳はアパレル関連業者が73人（32.6%）、学生42人（18.8%）、企画担当と素材担当がともに21人（9.4%）であった。アパレル・企画・縫製などアパレル生産に業務を供給する側が全体で120人（53.6%）と過半数を超えており、見学者の関心の高さ、この会の活動のユニークさを示しているものと思われる。学生が多かったのは会場付近の専門学校等が課題研修の一環として見学に訪れていたためのものである。

業界新聞においてもこの会の出展内容について「新しい仕組みやグループ活動の成果の紹介が目立った。尾州産地のオリジナル生地に独自の縫製技術を加えた商品を展示している。」と報告している。

まとめとして「素材の開発」から始まり、素材グループの人達との「コラボレーション活動」、「デザイン開発」、「生産研究」、「ジャパנקリエーション2001出展」、「アンケート調査と結果集計」、「ホームページ作成とアンケート結果公表」と多くの活動を計画し、実行した。多くの方と出会い、討論し、研究・勉強を重ねた経験は、きっとこれからの飛躍につながるであろうと述べている。さらにこの活動を通して養ったノウハウや商品知識等を元に、アンケート結果を活動にフィードバックさせることで、これからの「スカラベ」の輝きが、また増すことであろう。』と結んでいる。

この活動の成果として平成13年3月に詳細な報告書「新製品・新技術・新事業分野への進出に関する研究開発」がまとめられている。

5.さらなる発展に向けて

「ジャパנקリエーション2001」のスカラベ会のブースを視察した見学者の中からも数名がこのメンバーに加入し、さらにニットメーカーのオーナーも参画し、ほぼテキスタイル・アパレルのすべての分野がメンバーとなった。これにより、従来のアパレルだけの「もの作り」からアパレル素材・デザイン・企画・縫製・試験・検査・販売（消費者）まで、すべての工程に携わるものが参画したものの作りが可能となった。すなわち、「たて」のつながりが完成した。

2002年度以降の活動には大きな期待を寄せている。同時に関係諸機関・諸団体の積極的なご支援をお願いしたい。



図1 ハイパー会との交流風景



図2 ジャパンクリエイションにおけるブース風景



図3 真剣な討論風景